

被災者の思い 後世へ

命の大切さ共有訴え

第4期第7、8回詳報

311
伝える／備える
次世代塾

東日本大震災の伝承と防災啓発の担い手育成を目指し、河北新報社などが運営する通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」第4期は10月、第7回講座「被害の現場」を気仙沼市の小泉海岸からオンライン中継したほか、伝統芸能と地域再生をテーマに第8回講座をウェブ配信した。

折地区で消火作業を指揮。延焼を食い止めた翌朝、妻が行方不明と知った。救助捜索に従事する中、震災発生から6日後、厚子さんの遺体が小泉海岸で見つかった。

喪失感と悲しみは今も変わらないという。「二度とこのような思いをしたくないし、皆さんにしてほしくない。震災を後世に伝え、犠牲者の無念に伝えたい」と訴えた。

大学生約40人が受講し、質疑応答も行った。震災伝承に取り組む理由について佐藤さんは「大災害の怖さと被災者の悲しみを通して、国内外の人たちに命の大切さ、そして命を守ることの大切さを共有してほしい」と述べた。

精神的に落ち着いた時期を問われると「震災から2年間は消防の活動や妻のことを話さなかった。妻の三

回忌に教訓を後世に語り継ぐことを妻に約束してから、少し眠れるようになった」と答えた。

第8回講座は、同市浪板地区に約300年前から伝わる浪板虎舞の保存会会長

第7回講座の講師は、同市本吉町の元消防士佐藤誠悦さん(68)。震災発生直後の消防の活動を振り返った一方、震災で亡くした妻厚子さん(当時58)への思いを語った。

佐藤さんは当時、大規模な津波火災が起きた同市鹿

折地区で消火作業を指揮。延焼を食い止めた翌朝、妻が行方不明と知った。救助捜索に従事する中、震災発生から6日後、厚子さんの遺体が小泉海岸で見つかった。

喪失感と悲しみは今も変わらないという。「二度とこのような思いをしたくないし、皆さんにしてほしくない。震災を後世に伝え、犠牲者の無念に伝えたい」と訴えた。

大学生約40人が受講し、質疑応答も行った。震災伝承に取り組む理由について佐藤さんは「大災害の怖さと被災者の悲しみを通して、国内外の人たちに命の大切さ、そして命を守ることの大切さを共有してほしい」と述べた。

精神的に落ち着いた時期を問われると「震災から2年間は消防の活動や妻のことを話さなかった。妻の三回忌に教訓を後世に語り継ぐことを妻に約束してから、少し眠れるようになった」と答えた。

第8回講座は、同市浪板地区に約300年前から伝わる浪板虎舞の保存会会長



気仙沼市小泉海岸が大津波に見舞われた当時の状況を説明する佐藤さん

小野寺優一さん(76)が講師を務めた。浪板地区は住民約30人が犠牲になるなど甚大な津波被害を受け、虎舞も存続が危ぶまれた。震災から2カ月後、保存会は活動を再開した。小野寺さんは「地域を立て直すために、まずわれわれが元氣になり、その元氣を地域の人たちに届けようと考えた」と説明した。

受講生の声

悲しみ向き合う

消防の現場で指揮を執り続けた佐藤誠悦さんを通して、被災地で救助に当たる人も被災者だったと痛感しました。震災で奪われた命、遺族の悲しみをひとごととせず向き合うことが大切。被災地の人の声を聴き、少しでも思いを伝えられるように努めます。(仙台市泉区・宮城学院女子大4年・須藤安奈さん・22歳)

思いつなぎたい

家族の安否が分からないまま、消防士の使命を果たすため全力で活動した佐藤誠悦さんの話を聞き、自分だったら同じことができたろうかと考えさせられました。犠牲者や語り部を続ける遺族の思いを後世につなぐことが、私たちの使命だと感じました。(仙台市宮城野区・山形大4年・首藤海斗さん・22歳)



311「伝える／備える」次世代塾を運営する推進協議会の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工大、宮城学院女子大、尚絅学院大、仙台白百合女子大、宮城大、仙台大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構。